

比翼ひよくの束たばね 第六十六回

父の教え

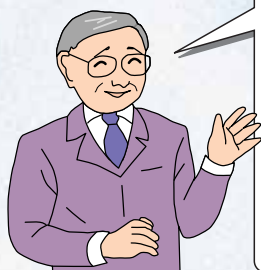
気が付いたら、いつの間にか古希を迎えた。大変長い時間を生きてきたはずなのだが、その実感はなくいつの間にか過ぎ去ってしまった歳月でもある。

振り返ってみると、記憶として鮮明に覚えているもの、彷彿として蘇ってくるものさまざまで、決して楽しく充実したことばかりではない。

悲しく、苦しかったことも多いはずであったのに、不思議なことに思い出のほとんどは懐かしく、愛おしく思えてならない。

残された時間には限りがある。時間を大切に人生の総仕上げをしつかりとやらなければならぬと思うことしきりである。

私(市長)の思いや願いなどを市民の皆さんにお伝えします。



私にとって本当によかったと思えることは、ことあるごとにたたき込んでくれた厳格な父がいたことである。羨はとくに敵しく、父からはいつも「弱い者をいじめてはならぬ」「大きい者が小さい者を殴つてはならぬ」「大勢で一人をやつてはいけない」「相手が泣いたり謝つたりしたらすぐやめるんだ」このことは必ず守れと厳しく言われていた。

このところ、大変残念な話を耳にする。いじめに苦しむ子どものこと、教師体罰のみならず生徒の教師への暴力行為など、教育現場でのさまざまな状況を聞くにつけ、教師としての在り方、子育て、とりわけ親の役割責任というものを考えさせられる。

言うまでもなく教育の原点は家庭教育である。幼児期、少年期における親子に対する私的な教育が、子どもの規範意識に大きな影響をもたらす。

私は、幼少期に卑法(品性、行為などが卑しく劣っていること)を憎む心をしつかりと育てなければならぬと思つている。

そのためには、わが国で古くから受け継がれてきた「家族の絆」を復活させなければいけない。

万引きなどしたら親を泣かせるよ。先祖の顔に泥をぬる。お天道さまが見ているなど、家族の絆が卑劣な行為を憎む心を育て、強化し、抑止する力となってくるからである。

NHK大河ドラマ「八重の桜」を関心をもつて見ている。

江戸時代会津藩に日新館という藩校があった。この藩校の子どもたちが必ず守らなければならない「什の掟」というものがあつた。

そこには、こう書いてある。

- 一つ、年長者の言うことに背いてはなりません
- 二つ、年長者にはお辞儀をしなければなりません
- 三つ、虚言を言うことはなりません
- 四つ、卑法な振る舞いをしてはなりません
- 五つ、弱いものをいじめてはなりません
- 六つ、戸外で物を食べてはなりません
- 七つ、戸外で婦人と言葉を交えてはなりません

これら七か条の後に、「ならぬことばならぬものです」という文句で結ばれている。

要するに「いけないことはいけない」と言つてゐるわけで、重要なことは、親が幼少の頃からしつかりと教え込むこと、理屈ぬきでしつけなければならぬということであろうと受けとめている。

価値観を押しつけることでももちろん子どもは反発したり、後になって新しい価値観を見出します。しかし初めに何らかの基準を与え、しつかりと教え込むことは大切なことだと思つています。

文部科学省の有識者会議が、過日道徳を「教科」とし検定教科書の使用を求める報告書案を公表した。

さまざまな受けとめ方や批判もあるようだが、人生のある場面において教科書で学んだ人物などの生き方が、自らの行動原理につながるものと信じている。

私は、三反百姓の7人兄弟の末っ子としてこの矢板で生まれ、矢板で育ち、今の地で生きている。中学生の頃、親父が口ぐせのように言つていたことがある。

貧しい暮らしの中で朝から晩まで働き、子どもたちを教育した。酒を飲むとよく口にしたのは、「こんな貧しいところにいても決していい生活はできない。お前は一生懸命勉強して東京行け」苦勞をして大変つらい思いをしてきた親父だから、せめて子どもにはと違ったに違いない。

私の親がそうであつたように、私たちもこれまで間違つた考え方で子どもを育ててきたのではないか。親のようになるな、いつも親を乗り越えろ、こんな貧しいところにいるもうだが上がらない、だから東京へ行け。

つまり自分の生まれ育つた地域を否定し、親を乗り越えることを教えてきたのではないか。

これからは、親と自分の生まれ育つた地域を尊敬する教育をやらなければならぬ。

そのためには、親が一生懸命生きていく姿を子どもに示し、絆を強めていかなければならないのであろう。

※タイトルの「比翼の束」とは、市民と行政を翼に例え、ふたつを束ねてまい進するさまをイメージしています。